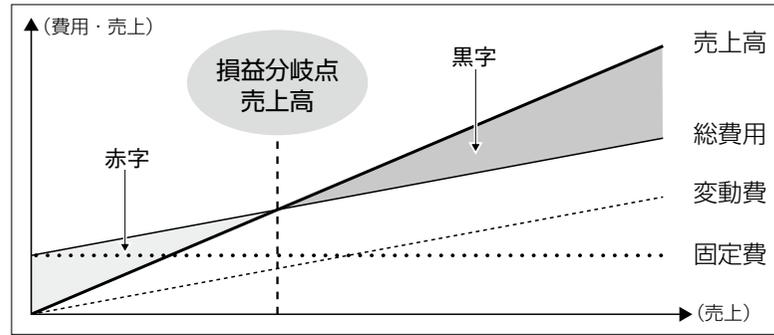


新任渉外担当者の目線で学ぶ 取引先の実態把握と 資金ニーズ発掘

新任渉外担当者のために、実態把握・資金ニーズ
発掘につなげる着眼点などを解説します。

ちばぎん総合研究所 常務取締役
吉野 裕

図表1 損益分岐点のイメージ



◆各勘定科目の変化・推移
財務諸表は勘定科目ごとに2期以上を比較し、推移をチェックします。著しく増減が大きい科目がある場合、適用会計基準や勘定科目の表示方法を変更した可能性があります。

図表2 損益分岐点売上高と損益分岐点比率の計算式

$$\bullet \text{損益分岐点売上高} = \frac{\text{固定費}}{1 - \text{変動費} / \text{売上高}}$$

$$\bullet \text{損益分岐点比率 (\%)} = \frac{\text{損益分岐点売上高}}{\text{売上高}} \times 100$$

適用会計基準や勘定科目の表示方法の変更を見逃ししてしまうと、業績が向上きなのか悪化しているのかという基本的な部分も正しく認識できなくなる可能性があります。どちらかの期の計上方法に合わせて数字を修正すると、業績の推移が理解しやすくなります。

金

融機関は、企業へ融資するにあたって、必ず対象企業の「信用力」を確認します。渉外担当者にとって間もないという読者の皆さんも、これからその確認に日々携わることと思います。

融資可否の判断をはじめ、融資期間や金利といった条件は、企業の信用力に応じて決定します。ただし、真の信用力を見極めないうまま判断を行うと、回収に懸念がないものとして実行した融資が、結果的にロスにつながってしまう可能性がります。

逆に、信用力を低く見すぎて慎重な条件を提示したら、企業にとって好条件を提示した他行庫に、ビジネスチャンスを奪われてしまうケースもあります。

融資を左右するこの信用力の判断には「実態把握」が不可欠です。とはいえ、実態把握は、しばしば形式的・表面的になりがちです。そこで本稿では、実態把握の基盤を踏まえたいうえで、具体的な着眼点やヒアリングのポイント等を解説します。

① 財務は「〇〇」を見る



実態把握のための視点は、企業の「財務」と「現場」という大きく2つに分かれます。第一のステップは、決算書を見て、財務状況を把握することです。

基本的には、以下に述べる着眼点で財務を見ていきます。その際には、必要に応じて、取得時の価額で表示されている資産を現在価値に引き直すほか、勘定科目の表示方法や計上金額を修正した「実態財務諸表」を作成します。

財務状況を正しく把握し信用力を判断する

◆在庫

鉱物資源（金属、原油等）や農作物等は、市況により価格が大きく変動します。原材料を高値で仕入れ、その後市況が下落した場合には含み損が生じます。含み損が隠れていないかしっかりと中身をチェックする必要があります。

◆売掛金・貸付金

明細表をチェックします。同じ

将来の企業の状況を予測することも重要

◆将来の業績予測

信用力という観点では現在の実態と同時に、将来の業績予測も重要な要素になります。どのような事象が起きると、その企業の業績にプラス（あるいはマイナス）になるかを把握しておきます。

その代表的な例は為替レートです。一般的に円安は輸出企業に、円高は輸入企業にメリットがあることはイメージできるでしょう。1円のレート変動で業績にどれくらいの影響があるかを、ヒアリングにより確認します。

◆損益分岐点

費用を固定費（売上にかかわらず一定の金額がかかる費用）と変動費（売上に比例してかかる費用）に分解し、黒字・赤字の分かれ目となる売上高を分析します。現在の売上高と損益分岐点売上高の比率である「損益分岐点比率」が高いと、現在は黒字でも、少しの売上低下で赤字になりやすいといえます。

取引相手に対して同じ金額が2期以上続けて計上されているようなことがあれば注意が必要です。その売掛金や貸付金は、回収不能（資産価値ゼロ）になっている可能性があります。

◆土地

地価の上昇、下落により含み益・含み損が発生します。また、建物が建っているか・更地か、自家用か・賃貸かで評価額は大きく変わります。

土地の含み損益は売却しない限り発生しないうえ、本業の収益力等と直接は関係ありません。しかし、土地は保全を考慮するうえで重要なポイントになります。

◆土地以外の固定資産（建物・機械設備等）

減価償却の明細を確認します。償却不足の場合には不足分の償却を実施して資産を評価し直すほか、不足分を計上して損益計算書を修正します。

◆有価証券

市場で取引される株式・債券等の有価証券は換金が容易であり、支払手段として現金・預金の補完

② 現場は「〇〇」を見る



製造業であれば工場、小売業であれば店舗などを実際に見ることにより、決算書だけでは分からない多くの情報を得ることが出来ます。例えば工場の場合、経営上最も望ましい状態は次のようなものです。

- ① 原材料がムダなく製品になる
- ② 製品の滞留なく出荷できる
- ③ 機械や人員がムダなく稼働している

製造業の生産形態には、顧客から注文を受けて製造する「受注生産」と、注文を想定して先に製造しておく「見込生産」があり、状況は異なります。以下、見込生産を行っている工場を例に実査のポイントを挙げていきます。

在庫や製品の状況とともに機械・人の稼働状況を見る

◆原材料在庫
劣化しないよう保管されていること、そして生産の状況に応じて適切に投入できる状態になっている